20220625

茨城大学図書館の土曜アカデミー

鎌倉殿の13人？常陸国守護！

八田知家とは何者か？

茨城大学人文社会科学部教授　**高橋　修**

はじめに

・謎多き有力御家人　系譜や苗字の地にさえ諸説あり.
・その実像に、実証的にどこまで迫れるか？

１、系譜をたどる―平安期―

⑴道兼流藤原氏の家系
①宗円
・道兼の孫、兼仲の弟,
右大臣藤原俊家の子
・石山寺の座主･宗円が、天喜元年(1109)、「前九年合戦」で源義家の命で宇都宮に下向、宇都宮座主となり安倍氏を調伏（「宇都宮系図」『群書系図部集』）　＊「後三年合戦」か？
・「三井寺禅師宗円」　【鴨志田 1195　野口 2013】
　*源頼義は三井寺に前九年合戦戦勝を祈願　…河内源氏と三井寺
②宗綱
・宗円の子？、実は中原宗家の子？、伯父兼仲の養子？（『尊卑分脈』他）
・養父兼仲や中原氏との親縁関係により京武者化【佐々木 1996　野口 2013】
・「故八田武者宗綱」（『吾妻鏡』）　…八田を名乗り、院武者所（鳥羽院か）に
・「八田(備後)権守」（『尊卑』『群書』）　…国司（目代）の郎等として
・女子･寒河尼（後に小山政光妻）が源頼朝の乳母に　…源義朝の家人
③朝綱
・「八田」と号し、後に「宇都宮」「宇都宮検校」（『尊卑』『群書』）…八田から宇都宮へ
　*大羽経由とみる説も【市村 2013】
・「鳥羽院武者所」「後白河院北面」→右兵衛尉→左衛門権少尉（『兵範記』紙背文書）
　【吉田 1979･1988、】
　*平安期の「東国武士としては異例な抜擢」【野口 1982】
④知家
・保元元年（1156)、「八田四郎」保元の乱に出陣（『保元物語』）　…義朝軍に加わる.
・「八田武者所」（『吾妻鏡』）　…院武者所（後白河院）に

※源義朝の子とする伝承は、小田氏が源姓を称する南北朝期以降のもの.
◎宗綱が京武者化して源義朝に仕え八田を所領とする。その子、朝綱が八田から宇都宮に進出して宇都宮氏となり、知家が八田家の家督を相続する。
◎宗円と宗綱の間の接続には疑問あり。宗円が実在したとしても、宗綱一族の始祖であるかどうかは別の問題。　☞２で再検討

２、苗字の地

・知家の本領を下野茂木保とみる説【糸賀 1988、土浦市立博物館 2022】
　建久 3 年 8 月 22 日付将軍家政所下文（「茂木文書」）の誤読？
　　「本木郡住人」　…知家のことではない．→形式的宛所
　　「治承四年十一月二十七日御下文」
　　※本領安堵ではなく、金砂合戦後の敵方所領没収による安堵とみるべきか
・八田氏の本領は小栗御厨八田（現筑西市）とみるのが適当【雨谷 1986　高橋 2009】
　小栗御厨は常陸平氏小栗氏の所領では？
　　→所領支配は一円的ではない．意外に狭小な領主開発領
　　郡荘の中に複数の武家領主が並存
　八田には城館地名や中世寺社が密集　…宇都宮・常陸府中ルート上の町場
　宇都宮・常陸府中ルートを押さえる常陸平氏との提携により、宗綱は本領を形成か
　　*宗綱は多気致幹（筑波山麓に本領）の女子を妻に
・朝綱は宇都宮・常陸府中ルートを通じて中世都市・宇都宮に進出（宇都宮氏の成立）
　　*その衛星としての町場･八田
・宗円は？
　その実在は、八田・宇都宮氏の始祖であることを意味しない.
　朝綱が宇都宮に進出した後、宇都宮社に伝説を残す宗円を始祖として取り込み、宗綱を「座主三郎」と位置づけたのでは
　　*前九年、安倍氏調伏 ･･･宇都宮社の性格、河内源氏との所縁
　※宗円について詳細を語るのは宇都宮氏の系図（『尊卑』には詳細な記事なし）
◎宗綱―朝綱・知家の本領は常陸国八田。そこから分出した朝綱が、宗円を一族の始祖に位置づけか。

３、頼朝のもとへ―治承寿永の内乱―

・治承 4 年、金砂合戦で敵方(佐竹方)所領を軍事占領か
　建久 3 年 8 月 22 日付源頼朝政所下文（「茂木文書」一）の本文引用の頼朝下文
　すでに治承 4 年 11 月の段階で頼朝方に連動した軍事活動？
・養和元年(1181、or 寿永 2 年 1183) 閏 2 月、志太義広の乱で戦功（小手差原･小堤の合戦）
　範頼を奉じた小山氏・下河辺氏独自の軍事活動（私戦）に参戦【菱沼一憲 2016】
・寒河尼の存在
　*義朝の家人となった八田宗綱の女子、知家の姉（妹)、頼朝の乳母、小山政光妻

⇒寒河尼を通じて早くから頼朝に通じる.
・義広の乱直後、小山一族とともに頼朝に拝謁
内乱初期の独自の軍事活動や、小山氏等の私戦への与力を、後に頼朝に味方した行動として説明　→頼朝による軍功認定
・養和元年４月、「弓箭に優れ隔心なき輩」の一人として嫡男知重が将軍寝所の警固に
→以後、八田父子は鎌倉殿・将軍家の側近御家人として
・元暦元年（1184）８月、知重とともに源範頼に従い西海出陣、翌年正月、豊後に渡る.
・文治５年（1189）７月、千葉常胤とともに「海道大将軍」として奥州合戦に出陣
※東山道…総大将･頼朝、北陸道…比企能員・宇佐美実政
◎初期には内乱に乗じた独自の軍事活動。後に頼朝与同の軍功と認定され、父子ともども側近御家人に。

４、建久四年常陸政変

・建久４年（1193)、富士の巻狩り、曽我兄弟の仇討の裏側で
☞「年表:建久四年常陸政変の経過と結末」
・(旧) 守護に補任された他国の武士･八田知家が旧勢力･常陸平氏の有力者である多気義幹を追い落とした事件　【網野善彦 1982、糸賀茂男 1988】
・(新) 東国の守護は補任の職ではない.【熊谷隆之 2008】
≒守護となったから行政権が与えられるわけではない！
※奥州合戦の海道大将軍としての国内武士の編成や常陸一の宮･鹿島社造営奉行は、そのまま守護職にともなう権限ではない.【上横手雅敬 1994】
⇒そもそも八田氏は、他国の武士ではなく常陸国内の有力武士・領主と考えるべき.
→常陸政変の本質は？
Cf.同年 12 月、下妻弘幹の梟首　…北条時政への「宿意」(？)が露見し頼朝の命を受けて
*多気義幹と並ぶ常陸平氏の有力武士
⇒知家は、頼朝の承認を取り付け、勢力を競う常陸平氏の有力者を一気に片付けた
…常陸国内の有力武士相互の利害競合が原因ではないか
○もともと八田宗綱は多気致幹の婿となり八田に留住・土着
→次第に宇都宮・常陸府中ルートをめぐる利害競合が深刻化
○事件後、八田氏が獲得した所領は筑波山西南麓一帯（南野荘、信太荘、筑波郡北条、田中荘）に　…もとは常陸平氏の一族の所領
Cf.知家の時代に小田（筑波山麓）に本拠を移した可能性も【広瀬季一郎 2022】
⇒鎌倉政権に対する対応をめぐって、提携していた知家と多気氏・下妻氏の政治的立場に変化が生じ均衡が崩れ、知家は謀略による領主間競合の一挙解決を目論む.

・知家は常陸一国の行政権をうかがう.
知重がたびたび常陸大掾職を競望（惣社宮文書、金沢文庫古文書）
*一国行政権　すでに実質は着々と
◦奥州合戦で東海道大将軍　…国内御家人軍事指揮権

◦鹿島社造営奉行　…常陸一の宮の管理責任

・知家の誤算

頼朝が常陸平氏の馬場資幹に多気義幹旧領（実際には南郡等一部）を安堵

資幹に常陸大掾職と常陸府中地頭職を認め、惣領として「常陸平氏」の編成を期待

【高橋修2010】

・北条政子（～1225）が常陸大掾職の「他人（常陸平氏以外）競望」禁止（金沢文庫古文書）

↕

・安貞２年（1228）の文書に「守護人知重」（鹿島神宮文書）

※西国の守護になぞらえ、八田氏は国内行政権を「守護」として位置づけ

◎知家は、頼朝の命を引き出し、領主としての利害が競合する常陸平氏の有力者を謀略で陥れるが、一国行政権にかかわる常陸府中の支配権や常陸大掾職は馬場資幹に安堵される。→替わって自らを「常陸守護」と位置づけ。

５、京都に馴れるの輩

・『吾妻鏡』元暦２年（1185）４月 15 日条

知家、頼朝の内挙を得ずに右衛門尉任官　→頼朝激怒

「八田武者所」　もともと京武者として後白河院に仕え任官を待つ.

『吾妻鏡』も「東国住人任官輩」とは別に

鎌倉御家人である一方で、依然として院の命に従う京武者でもある.

→知家は、任官は当然という認識では

・『吾妻鏡』文治４年（1188）５月 20 日条

知家郎従･庄司太郎が「大内夜行番」を「懈緩」

*夜毎に御所の内を警固する役目（『武家名目抄』）

『玉葉』に関連記事

前年冬、（朝廷から）催促された「京中夜行」を庄司太郎が無断欠勤

検非違使が太郎を逮捕　→知家が別の郎従を使い奪還

朝廷が頼朝に抗議　→頼朝は太郎を検非違使に差し出す.

⇒朝廷は知家を、頼朝の御家人と認めながらも「大内夜行」の「番」に編成

…平安期以来の京武者としてのあり方

・『吾妻鏡』建久元年（1190）10 月３日条

頼朝上洛！御家人集合　→鎌倉進発に知家が遅刻、午の刻（正午頃）に到着

頼朝、先陣・後陣の人選、自身の乗馬について知家の指示を仰ぐ.

全軍の出発を遅らせてまで、上洛軍について知家の知見が必要

・八田父子がたびたび京の貴人を接待（『吾妻鏡』）

平頼盛（1184）、静御前（1186）、史生守康（1188、1189）、中納言法橋観性（1189）、東大寺別当勝賢（1194）、丹波時長（1199）、陳和卿（1214）

・承久３年（1221）、承久の乱

知家は宿老として鎌倉に留まる.

三男･茂木知基が出陣して軍功　→恩賞

※ただし六男･知尚は京方につき戦死　…知家の京武者としての立場を継承か
◎頼朝の傘下に入った後も、京武者としての意識と活動を継続する。頼朝も「京都に馴れる輩」の必要性を強く認識し知家を重用。最終的には承久の乱で京武者を捨て鎌倉御家人を選択。

６、失脚の危機と引退

・頼朝没後、十三人の合議制（『吾妻鏡』建久 10 年(1199)4 月 12 日条）
　（旧）二代将軍頼家から将軍親裁権の剝奪
　（新）訴訟の取次を 13 人に限定、新将軍を支える体制
　　⇒親将軍頼家派もいれば、反頼家派も
・建仁 3 年（1203）5 月、阿野全成事件
　　北条時政の婿で実朝乳母夫の全成が謀叛の疑いで逮捕
　　常陸国に配流　≒身柄は「守護」八田知家に
　　6 月、八田知家が下野で全成を誅殺
　　…直接手を下したのは下野茂木保を継承した三男の茂木知基か
・この直後に知家は筑後守に任官
　　頼家派としての機敏な働きに対する論功行賞【糸賀 1989】
　　知家の極官　→一族は「筑後」氏
・同年 9 月、比企氏の乱→将軍頼家失脚、実朝が三代将軍に
　　これ以後、八田知家の記事が『吾妻鏡』から消える.
　　→引退・出家　　※極楽寺の鐘銘（等覚寺蔵）に「建永」(1206-07)「尊念」
　　嫡男知重、六男知尚は実朝に出仕、知重は畠山重忠追討にも出陣
・建保元年（1213）2 月、泉親衡陰謀事件
　　信濃国住人泉親平が頼家の遺児を奉じて挙兵を計画
　　知家三男の八田三郎（茂木知基）に嫌疑　→守護に「召進」命令、多くは配流
　　5 月、この事件で和田胤長が赦免されないことを恨み、和田義盛が挙兵
　　⇒和田義盛の蜂起をいち早く大江広元に伝えたのは八田知重！
　　戦闘の中で知家四男･宍戸家政が討死に！
　　…義盛も元親頼家派、泉親平事件に一族が連坐
　　一族が同じく連坐した八田家からは義盛蜂起を即座に密告、鎮圧に協力
　　→和田氏与同の疑念を払い幕府に忠節をあらわす行動.
◎知家は十三人の中で親頼家派として筑後守任官を実現。将軍頼家失脚により引退、実朝将軍体制下で八田家の立場は微妙なものに。和田の乱では挙兵を密告、積極的に戦闘に参加することによって、義盛に与同しないことを明示し幕府の信用を回復。

おわりに―知家が遺したもの―

・京武者の鎌倉御家人参入の典型
・知家は謀略をもって成功と失敗

・幕府・将軍からの重用、反面では警戒も
・京武者が仲立ちした信仰文化の展開へ
　◦浄土信仰、善光寺信仰、律宗
　◦やがて笠間時朝の和歌と造仏へ

【主な参考文献】

雨谷　昭「八田知家考 系譜的研究」(『常総の歴史』４、1989 年)
網野善彦「荘園・公領と諸勢力の消長」(網野『日本中世土地制度史の研究』塙書房、1972 年初出)
　同　　『里の国の中世』(平凡社、1986 年原形初出)
市村高男「中世宇都宮氏の成立と展開」(市村編『中世宇都宮氏の世界』彩流社、2013 年)
糸賀茂男「常陸守護と小田氏」(糸賀『常陸中世武士団の史的考察』岩田書院、1989 年初出)
上横手雅敬「守護制度の再検討」(上横手『日本中世国家史論考』塙書房、1994 年)
鴨志田智啓「宇都宮出自考」(『歴史と文化』4、1995 年)
佐々木紀一「桓武平氏正盛流系図補輯」下(『国語国文』65-1、1996 年)
高橋　修「『常陸守護』八田氏再考」(地方史研究協議会編『茨城の歴史的環境と地域形成』雄山閣、2009 年)
　同　　「中世前期の都市・町場と在地領主」(『中世都市研究』15、2010 年)
　同　　「中世常陸の馬と武士団」(『馬の博物館研究紀要』19、2014 年)
　同　　「『茂木知定』の幻影」(高橋編『戦う茂木一族』高志書院、2022 年)
土浦市立博物館編『八田知家と名門常陸小田氏』(図録、2022 年)
野口　実「東国武士と中央権力」(野口『中世東国武士団の研究』高科書店、1882 年初出)
　同　　「下野宇都宮氏の成立と、その平氏政権下における存在形態」(『京都大学宗教・文化研究所研究紀要』26、2013 年)
広瀬季一郎「小田城の成立とその構造」(土浦市立博物館編『八田知家と名門常陸小田氏』)
菱沼一憲「野木宮の合戦再考」(『地方史研究』379、2016 年)
藤本頼人「源頼家像の再検討」(『鎌倉遺文研究』33、2014 年)
松本一夫「寒河尼」(松本『下野中世史の世界』岩田書院、2006 年初出)
吉田早苗「京都大学附属図書館所蔵『兵範記』紙背文書にみられる申し文」(『東京大学史料編纂所報』14、1979 年)
　同　　「『兵範記』紙背文書にみえる官職申文（上)」(同 23、1988 年)
『全訳 吾妻鏡』一、二（新人物往来社）
『吾妻鏡』一、二（新訂増補 国史大系、吉川弘文館）